

東都洛陽に在りし時、初めて此の教を知り、遂に其の僧侶を伴ひて北歸したるに基くものにして、始め吐火羅地方より傳へられたる此の教は、唐にては未だ流行の勢を得ざる間に、回鶻に入りて行はれ、更に回鶻によりて唐に行はるゝに至りしなり。

〔二二二〕 佛祖統記卷四十二に「會昌三年京城女末尼七十人皆死、在回紇〔中歟〕者、流之諸道……勅天下末尼寺、並令廢罷」と記せり、摩尼教が斯く會昌五年に於ける諸外教の禁斷に先立ちて禁止の運命に遭遇したるは、全く唐に對する回鶻の勢の衰滅に伴ひたるものに外ならず。

〔二二三〕 殺胡山の位置につきては今考無し、塞外振武に近く黑車子室韋に通ずる途次に當るべきは勿論なり。

〔二二四〕 室韋考、史學雜誌第卅編第二號一六四頁。

〔二二五〕 舊唐書本紀には「烏介可汗中箭走、投黑車子」とし、同書張仲武傳には「盡徙餘種寄託黑車子」と見ゆ。

〔二二六〕 室韋考、史學雜誌同上二六七頁。

〔二二七〕 冊府元龜には不取の二字を脱せり。

〔二二八〕 註〔二〇三〕參看。

〔二二九〕 此の監使と曰ふは、回鶻より室韋に派したる監使にして、歲貢を督し、又唐の事情を探るを任務としたるものなり。

〔二三〇〕 二〇三頁及び註〔八六〕參看。

〔三三一〕 回鶻の使が（四六頁參看）咸安公主を迎へんとせし時、振武地方の室韋に攻められて死するに至りしことの如きは此の關係の變轉したる一例と見るべし。

〔三三二〕 會昌二年（九月）回鶻破と曰へるは、必ずしも此の年月に回鶻の破れたるを曰へるには非ずして、既に回鶻が北方に破れ勢衰ふるに及び、此の年月に契丹が唐に内附するに至れりとの意と解釋せざる可らず。

〔三三三〕 冊府元龜封冊篇。